

僧肇の菩薩理解

——特に法身菩薩について——

竹 林 遊

はじめに

老莊思想と仏教が思想的に類似する面と相違する面を併せ持っていることは、多くの研究者が指摘している。その一差異として、以下の二点を挙げることができる。第一に、いかにして究竟者に至るか、という修道体系を仏教が有していることである。第二に、究竟者に至るための行を実践する、凡人と究竟者との中間的存在として、菩薩の存在を説く点である。いずれも、老莊思想では明確に説示されていない⁽¹⁾。

僧肇（三八四又は三七四—四一四）は、初め老莊思想に通じていたが、旧訳『維摩經』を読み、出家し仏教に転じた⁽²⁾。「菩薩」という老莊思想に無い概念を、僧肇がいかに理解したかを考察することは、僧肇の思想を理解する上で意味があると思われる。

「菩薩」に関して、『注維摩』僧肇注を概観すると、僧肇は法身の菩薩、そして菩薩階梯の七住を重視していることが確⁽³⁾

認できる。法身に関しては、僧肇の法身説がいかなる構造を持つ⁽⁴⁾か、また菩薩階梯に関しては、僧肇の十地思想の構造とその特徴⁽⁵⁾について、研究成果が報告されている。

以上をふまえ本稿では、老莊思想に無い「菩薩」の概念を僧肇はどのように理解したかを確認し、僧肇が重視する法身の菩薩と、菩薩階位の七住とがいかなる関係にあるかを『注維摩』によって考察する。

一 菩薩の基本的理解

まず僧肇の菩薩に対する基本的な理解を確認したい。

肇曰、菩薩正音云菩提薩埵。菩提仏道名也。薩埵秦言大心衆生。有大心入仏道、名菩提薩埵。無正名訳也。

（大正三八、三二八頁b）

ここで僧肇は菩薩を「さとりを求める心をもって仏道を歩む者」と理解する。『大智度論』にはほぼ同様の釈が確認できる⁽⁶⁾ことから、僧肇の「菩薩」そのものに対する解釈は、一般的

な解釈であると言える⁽⁷⁾。菩薩の実踐行についても僧肇は「問疾品」注釈において次のように述べる。

肇曰、若能善調其心、不懷異想、而永処生死、断彼苦者、是菩薩菩提之道。
(大正三八、三七八頁a)

菩薩は自身の心をよく調伏して異想をもたず、永く生死にとどまり衆生の苦を断つことが、菩薩の仏道の実踐行であるとする。このように、二極の一方に偏るべきではないとする解⁽⁸⁾釈は、該当箇所⁽⁹⁾の経文にほぼ沿っており、また『維摩経』の随所に説かれる。したがって菩薩の実踐行に関しても、僧肇が独自の解釈をしているとはいえない。

以上、菩薩に対する僧肇の基本的理解を確認した。菩薩という存在は、一般的な語義解釈によって理解されている。また菩薩の実踐行についても『維摩経』の教説に準じて理解される。いずれにしても僧肇の解釈に特異な点は見られない。

二 法身及び法身菩薩の理解

(一) 法身の理解

次に僧肇の法身理解を検討したい。「弟子品」では、三界から超越した法身と、三界にある結業の報身とを対比して次のように解釈する。

肇曰、三界報身、六情諸根從結業起、名為有作相也。法身出三界、六情諸根不由結業生、名為無作相。夫以有作故有所不作。以

僧肇の菩薩理解(竹林)

法身無作故無所不作也。(大正三八、三五四頁c—三五五頁a)

ここで僧肇は身の形態による「作」の相異を問題としている。三界の報身は、結業によって感覚・認識が起ころるので、「作す」ことが有る。しかし「作す」が有ることは同時に「作さない」ものを生み出すと論じる。対して法身は、感覚・認識は結業から生じないので、「作す」ことは無い。しかし「作す」が無いということは、同時に「作さない」も無いと論ずる。この「無」と「無所不」の論理によって、僧肇が提示するのは三界報身の有限性、そしてそれを超えた法身のあり方ではなからうか。僧肇は同様の論理を用いて、

肇曰、法身無為而無不為。無不為故現身有病。無為故不墮有数。

(大正三八、三六〇頁a)

と述べる。ここでさらに「不為」が無いことを根拠として、維摩詰はその身に病を現ずることも可能であると、法身の自在性を示す。僧肇は法身を「無」と「無(所)不」によって解釈し、そこから法身の無限定性と自在性を論じている。この理由は、

肇曰、群生無量所好不同。故修無量淨土以応彼殊好也。

(大正三八、三三〇頁b)

とあるように、衆生が無限の多様性を有し、それに菩薩は応じる必要がある点に裏付けられよう。

（二）特定の人物を法身菩薩とする意図

『注維摩』において僧肇は、特定の人物を法身の菩薩として位置付ける。その意図を以下の釈から探ってみよう。

肇曰、維摩詰秦言淨名。法身大士也。其權道無方隱顯殊迹。釈彼妙喜現此忍土、所以和光塵俗因通道教。…故欲顯其神德以弘如來不思議解脫之道。

（大正三八、三二七頁c）

肇曰、天女即法身大士也。常与淨名共弘大乘不思議道。故現為宅神、同处一室。

（大正三八、三八七頁a）

ここでは、その人物を「不思議解脫の道を弘通する」者として僧肇は解釈している。この点が特定の人物を法身菩薩とした理由として挙げられよう。この「不思議解脫」について、

此經始自于淨土、終于法供養、其中所明雖殊、然其不思議解脫一也。

（大正三八、三二七頁c）

僧肇は、『維摩經』の「仏国品」から「法供養品」に至る中で、説示されることは異なっているようだが、全てが不可思議解脫を明かすことに同じであるとする。このように僧肇は『維摩經』に一貫する主旨が不可思議解脫であると解していることから、それを弘通する人物に注目する事は不自然ではない。

三 菩薩階位と法身菩薩の関係

次に法身菩薩と菩薩階梯との関連を見てみよう。前節において、僧肇が重視する法身菩薩は、不可思議解脫の道を弘

め、衆生済度のはたらきが無限であり自在である菩薩を想定していると確認した。次の肇注は、不可思議解脫を得た境地の様態と、それを得る段階についての理解を示すものである。

解脫者自在心法也。得此解脫則凡所作爲、内行外応自在無閼。此非二乗所能議也。七住法身已上乃得此解脫也。

（大正三八、三八二頁b）

僧肇は不可思議解脫を得た状態を、自身の内に積む徳と外に応じる智において閼げが無く意のままとなることと理解している。そしてこの解脫は、法身をとり、階位としては七住以上で得る解脫であるとする。したがって僧肇は、經典を貫く主題である不可思議解脫は、七住の法身において得られると解している。また不可思議解脫の内容が、菩薩自身の行と衆生済度に自在を得る点は、前節に見た僧肇の法身解釈に符合する。また僧肇は次のようにも釈する。

肇曰、既得法身入無爲境。心不可以智求、形不可以像取。故曰無量。六住已下名有量也。

（大正三八、三三〇頁a）

この箇所では、法身を得た者と六住以下の者とを対比する。僧肇は、六住已下は限度・限定を有する、有量と名づける。対して、法身は無爲の境地にあり、心は認識する作用、姿形はその象するという作用によってとらえられない。それ故、限度や限定にとらわれない無量とする。「已に法身を得て無爲の境に入る」ことは、六住よりも高次の段階、少なくとも七

住より先の段階を指すことは明らかである。したがって、菩薩は七住以上の段階において法身をとる、と僧肇は理解している。

僧肇は、不可思議解脱と法身はいずれも七住以上において具わると理解している。ここに法身菩薩と菩薩階梯との関係が見られる。

まとめ

僧肇は「菩薩」について、基本的な理解は一般的あるいは『維摩経』の説示内容に沿っている。凡人から聖人に至る過程や、その過程にある者について、老荘思想の文献では明確な形で説示されない。僧肇が菩薩や菩薩の実践行に関して、仏教経論により理解することは当然といえる。

『注維摩』によれば、衆生を済度するはたらきにおいて無限性と自在性を有し、且つ不可思議解脱を弘通する者が、僧肇の想定する法身菩薩である。また菩薩階梯の六住と七住との間に差を設け、僧肇が特に七住以上を重視する意図は、不可思議解脱と法身を有しているか否かに基づく。

- 1 横超慧日「鳩摩羅什の法身説」(『印度学仏教学研究』一〇—一、一九六二)の指摘による(三九頁)。
- 2 梁・慧皎『高僧伝』、大正五〇、三六五頁^a。
- 3 木村宣彰『注維摩経

僧肇の菩薩理解(竹林)

序説』(東本願寺出版部、一九九五)二〇五—二〇七頁。

4 武田公裕「僧肇の法身観——曇鸞二種法身説の一背景として——」(『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』一九、一九九八)。

5 高城梓「僧肇の十地思想——『注維摩詰経』を中心として——」(『集刊東洋学』九一、二〇〇四)。

6 大正二五、八六頁^a。

7 対して同箇所(鳩摩羅什の釈は、僧肇とは観点を異にする。羅什は菩薩を、生活様式(出家・在家・他方国土から来る)と身のあり方(結業身・法身)との二つのカテゴリーに分け理解する(大正三八、三二八頁^b)。

8 大正一四、五四五頁^a。

9 例えば、大正一四、五四五頁^b(問疾品)、同五四九頁^a(仏道品)、同五四四頁^b(菩薩行品)等に見られる。

〈キーワード〉七住、不可思議解脱、『注維摩詰経』

(大谷大学大学院)